〃あの日〃

原　歌

今年は戦後三十四年になるという。

あの日は、私の人生の丁度真中にあたるけれど、これからは一年一年と遠くなりつつあるわけだ。これからあと、その三十四年の半分も生きられそうもないと考えると、一寸あわててしまう。十七年はおろか、十年だって危いかもしれない。

今年は新年早々、目まいがしてどうにも起きられず、とうとう二日も寝こんでしまい、それが昨年末にいろいろ忙しい事があり、無理をつづけたせいとわかっているのだけれど、其の時は年末なのだからと、そんな忙しさはあたりまえと思っていただけに、すっかり自信をなくし、つくづく我が身の年令を思い知らされたわけだ。

それで、今のうちにあの日の事を、どんなに厭でも、書いておかなければならないときめた。思い出したくない、それでいてどうしても忘れられないあの日の事を。

或る少数の人を除いて、全世界の人々が思ってもみなかった恐しい、広島一九四五年八月六日朝原爆投下。大手町九丁目の家で被爆。娘二人に息子一人と私。

広島にはその後一年半ばかりいてから、この三重県に移り住んだ頃は、聞かれるままにその恐しさ、むごたらしさを話してあげた事もあったけれど、原爆被災者の白血病やケロイド等、子孫にも及ぼすかもしれない病気のことが問題になって来てからは、なるべくそのことにふれない様になってしまった。それは年頃になった娘の縁談にも影響するからだった。あんな広島のかなり爆心地に近い処にいたのに、私たち母子とも火傷もせず、白血病にもならず、今まで普通の状態で過して来れたということは、数少い幸運なのだけれど、一方では死んだ人、怪我をした人、火傷や病気で苦しんでいる沢山の被災者の方々に対して、肩身のせまい、申しわけのない思いさえするのだった。あの場合、何処に居たか、何をしていたかのほんの紙一重の偶然の結果なのだけれど。

あの日のことはもう忘れてしまいたいと、ずうっと思っていて、その映画を見るのもいや、小説を読んでも何処か一寸違うと感じるし、毎年広島での記念日のニュースも、遠い目で他人事の様につき離して来たのだけれど、あの日が私の人生の真中より遠い日になってゆくことを思う時、やっぱり私の原爆記を今、書いておかなければと思う様になった。あの日のことを、なるべく精しく思い出して書き留めるという作業は、心の重く、辛い努力のいることになりそうだ。

原の父は、もともとは九州の久留米市白山町の出身で、東京美術学校日本画科を下村観山等と同じ頃出たのだけれど、しばらくして広島高師の図画教師になり、明治の末頃には広島に住むようになった。大正になるかならない頃、新築の借家に移り住んだのがその私達もいた大手町九丁目の家である。

大きな松の木が真中に繁り、庭いっぱいの木や草は、父が写生や遠足に行った山野から採って来て、植え育てたものばかりだった。永年住み慣れたその家は古風で、座敷が並んでいて縁側があり、庭の垣の外は、昔はすぐ川になっていて、子供達は泳いだり、舟遊びをしたり出来たそうだけれど、もう私の知っている頃は、埋めたてられ、畑や道路がついて、元安川の堤防になっていた。

その父は、二十年二月雪の降る頃、栄養不良の為か、一寸した風邪で亡くなったけれど、その夏の地獄のことを思えば、簡単ながら親類も集り、葬式らしいことが出来ただけでも、却ってよかったのかもしれない。姑はその一年前に亡くなっている。まだ故郷のお寺に納めに行けず、家にあった父のお骨は、被爆の焼けあとから、再び夫が小さな鐘に何とかひろい集めたのだった。

私達一家は、十二月八日の開戦のラジオは徳島で聞いたのだけれど、其の後広島の学校に転任して、原の両親と暮す様になった。戦時中の広島の物資不足は大変なもので、現在だったら犬どころか、ねずみも食べない様なものでも食べなければならなかった。わずかばかりの配給品や、近くの農家へ行って、辛い思いをしてわけてもらう野菜などで、何とかして日を送っていた。それでも親類や知人に農家のある人は、まだよかったけれど、そんなつてのない我が家ではわずかの配給米に、これも配給の大豆や高粱を入れ、又は大根葉やさつま芋の入った御飯かおじやばかりだった。町のだんご屋では、代りにおからに一寸粉をまぜてふかしたものを売っていたけれど、すぐ売り切れになる。雑炊食堂というのが出来て、大きな鍋をすえ、ほとんど水ばかりの様な雑炊が煮えていて、それを買って食べるのに長い行列が出来る。一人丼に一杯づつで汁の中には若芽に似て非なる"あおさ"がきざんで入っていて、申しわけに醤油かお味噌のうすい色がついている。空き腹をかかえた私達は子供の手をひいて、その列に並ぶ。家に老人や病人を抱えている人は、鍋を持って来てそれに一杯分をあけ、何度も列の後につくのだった。その列の横を大きな魚を積んだ軍用トラックが通り、あらゆる物資の大方は、お国の為に戦っている兵隊さんの為の大義名分で、軍に流れこみ運びこんでいるのだった。軍に関係していれば、お酒はおろか砂糖でも米でも肉でも、大して不自由なく手に入る様だった。

師団のある、軍都といわれていた広島の庶民の自分たちは一番みじめだったのだろうけど、当時は何も知らず、何も知らされず、疑うことも知らない自分たちは我まんするだけで、空襲の恐しさと、空腹とをかかえての毎日を過していた。我々の頭上には軍隊が大きくかぶさっていたけれど、それは直接に感じられず、ことに夫は召集されていなかったし、義弟も一度召集されたけれど其の頃は広島で、勤めていたし、それよりも一番我々にとって恐しいのは、警察と警防団だった。わずかばかりの食料品を手に入れて帰るのを見つければ、情容赦もなく取り上げ、何か反対すれば理屈かまわず「非国民」と罵しられ、恐しい思いをさせられるのだった。あの竹槍訓練や防火演習などの、前近代的なことは誰が考え出し、誰が命令したことなのだろう。焼夷弾が天井に止まらないようにと、家々の天井をはず

させたりしたことなど、誰が考えてもお笑い草だと思うのだけれど、警防団の絶対命令だった。高い空から落ちて来て屋根瓦をつき破った物が、木の天井に止って燃え出すものだろうか。

二十年の春頃から広島の町は、学童や老人の疎開、物の疎開の他に建物の疎開ということが始り、重要な建物の周囲の家は取りこわされることになった。行き先きがあろうが無かろうが、否応なしに軍隊が来て、柱を切り綱をつけて引き倒す。家財道具を運ぶことも出来ず、道路には立派な箪笥など並べてあっても、皆買うどころか見むきもしない有様で懐しい思い出も、限りない愛情もあっただろうに、皆ふみにじられ、切りすてられて、無惨な町と化しつつあったのだ。

今、其の頃の自分を思い出してみるのだけれど、本当の人間らしい感情など持っていたのだろうか。暑い夏の毎日毎夜、空襲に脅え、空腹を抱えて、その日その日を何とか過してゆけさえすればよかった。戦争はいつ終るともしれず、終ることも考えられず、ただ新聞ラジオで知らされることだけを聞いて疑うこともせず、そんなものだと思って我慢しているだけだった。

一寸の空地というより土があれば、何か野菜を植え、食べられるものなら葉でも茎でも食べた。私たちの家は庭と反対側に玄関があり、黒板塀に格子戸のついた門があって、門内には、二、三本の植木などあったのを掘り返して畑にしてしまった。同じ様な家が五、六軒並んでいて、その先きの一番はしの、川岸の道へ出る角に馬車屋があり、私は馬が出ていった後の馬小屋から、まだあたたかい馬ふんを、バケツ一杯もらって来て、その小さな畑に入れ茄子の苗を植えた。そんな畑からも美しい可愛い長茄子が実って、あの日の朝の食卓には紫色のおいしそうな漬物が、小鉢に入れられてあった。新鮮で宝石の様に美しかったのに、とうとう口には入らずじまい。その朝は、高粱が沢山の赤い御飯。戸棚には玉子が三コばかりあったけれど、これは呉に勤労動員で学生と行っている夫が帰って来たらと大事にしまってあった。鶏を飼っているお隣からいただいた貴重品の玉子なのだ。あんな事ならすぐ子供に食べさせておけばよかったと後悔した玉子が。

ゆうべからの空襲警報が解除になり、しばらく眠って起きた朝は、とても天気がよく、暑くて、朝食の用意をしながら門前を掃除したり、お隣りの奥様と一寸立ち話をしたりして家へ入り、子供達を起し、台所の土間から上った板の間の食卓に坐り、これから食べようと箸を持ったところだった。暑いので皆裸に近い格好で、一口食べたか食べない時、小学二年生の長女が「B29の音がする」と云う。まさか警報は解除になっているのにと思う間もなく、縁側の外がパアッーとうすいバイオレット色に変った。光のない不透明なものに満たされていると見た瞬間、グワッ――とも、ゴウ――ともしれないすざましい音と共に、天井が壊れ落ち、畳がまくれて一せいに押しよせ、私達の上から太い梁やら壁土等、むちゃくちゃに覆さって来た。嵐が庭から台所に吹きぬけ、又戻った様に何もかもが、ひどい有様だったけれど、まだ押入れのあたり、室と室との境の柱や箪笥などは立っていたし、私の後の大きな古い戸棚も倒れなかったので、私はすぐぬけ出すことが出来た。食卓の囲りにいた三人の子供も、何とか梁や壁土の間から、大した傷もなく引っぱり出すこと

とが出来た。

「とうとう我家に爆弾が落ちたのだ！」と思って、長女に「早くお隣りに知らせて」と云った次ぎの瞬間庭の向うを見て、もうそんなことは無駄だと悟った。ただ子供等をつれて逃げなければならないということばかりが、あわてた頭にあるだけだった。

非常持出しの貴重品もまとめてあったのに、何処へ行ったかわからず、裸同然の自分達なので手あたり次第その辺に見つかった物を子供達に着せ、防空頭布もある子や無い子や、目につく物を持てるだけさげて、履物も見つからないので裸足で庭の方へ出たのだけれど、そこで本当にこれは大変と改めて驚いてしまった。

庭の塀は勿論、お隣りも川の向うも全部こわれてしまい、あちこちから火災が起り、高い松の木の梢にも火がついて燃え出している。川岸の堤防の道を、裸同然の人が二人、三人と、フラフラ歩いて来る。幽霊の様だ。

小さい子を三人もつれた女一人の自分の事を思うと、ますます早く逃げなければという気持ちばかりで、何か物を持ち出すどころではない。

夢中で堤防の上に出てみて、目に入るその光景は想像したこともない有様だったのだけれど、本当はそんな事は其の後の事にくらべれば、まだまだ大したことではなかったのだ。その時広島市全体に起っていることを知るすべもなかったけれど、やがてあちこちから煙や火が立ち上っているのを見ると、何時この家にも燃え移って来るとも知れず、逃げ道をふさがれないうちに早く行かなければとの思いでいっぱいだった。

其の時、お隣りの奥さんが縁側から、

「誰か来て手伝って！　助けて！　甥が下敷きになって出られないから」

としきりに叫んでいるのが見えた。お隣りの夫婦はずっと年配で子供がなく、中学生位の甥御さんが一緒に住んでいた。お隣りは田舎に親類もあり、大方の家具等早く疎開させ、庭の防空壕も二つ作り、一方には食料品等沢山用意してあるとか、裕福な暮しの様に噂されていた。うちは小さい子を抱えての、余裕のない暮しだったので、あまり親しい交際はしていなかった。その奥さんが一生懸命手を振っているのが見えるのだけれど、我が子の手を離してかけつける事も心もとなく、女の私が役に立つ力も無いと、自分で自分の気持ちに言いわけをして、見て見ぬふりでそのまま川下の女学校のグランドへ避難してしまった。後でその甥御さんはすぐ助かったと聞いたけれど、そうでなかったら、私は一生、辛い思いをしただろう。其の時の事を思うと、自分に自信がなくなる。いざという時になると、動物的、利己的な人間でしかなくなる人間にすぎない自分だったと。

やがて其のグランドには、あちこちから逃げて来た人が集っていっぱいになって来た。防空服装をつけている人など殆んどなく、裸に近いか、ちぐはぐな格好で、大怪我の人や火傷の人、やっと杖をついて来た人、抱え助けられて来た人など、あちこちで苦しそうにしている。顔見知りの近所の奥さんが、小さな男の子に手をひかれ、やっとたどりついたらしく、見れば身体の方々に大きな切り傷があるのに、あまり血は出ていなく、と

ても苦しそうな息なのに、どうすることも出来ず、皆放心状態でぼんやりつっ立っているばかり。あたりを眺めたり、川向うの火をうつろな気持ちで見ている。そのうちに川下にかかった木の大橋の橋桁の先きに、火がついて燃え出したのに気がついた。あたりの人々も気がついて叫び出し、男達が川から水を汲んでかけ、やっと消しとめた。それであの橋はあの時助かったと思うし、上流の橋は殆んど焼けてしまった様だから、随分役に立ったと思うのだけれど、今はどうなっているのか。

そんなさわぎの中でぼんやりしていた時、後から「お姉さん、お姉さん」というかすかな呼び声がする。よく見ると義妹ではないか。白い木綿の小さな上衣と下着で、絆のモンペはひもはかり。頭の毛は焼けちぢれ、顔も火ぶくれて、苦しそうな息でかすかな瞳をあげ横たわっている。この妹は義弟と二人で近くに別な小さな家を借りて暮していて、丁度其の日は建物疎開の後片づけの当番になり、市役所の近くの道路で、多勢の人達とこれから仕事にかかろうとしていた処だったそうだ。「頭の上から熱いお釜をかぶせられた様で、何が何だかわからなくなった。それでも何とかしてやっとここまで逃げて来たのよ」と、其の時はとぎれとぎれながら話してくれたけれど、時が経つにつれて「お水を、お水を」と言うのがやっとになってしまう。広場の隅の水道から私は鉄かぶとに水を汲んで来て、口に入れてあげようとしても、口の中ははれていてよく入らない。口の中だけではなく、あの熱い空気を吸いこんだ身体の中も、すっかり火ぶくれになってしまった様だ。傷のある人には水をやるなと注意する人もあったけれど、もうそんな段階ではなく、水を口に入れてあげる位のことが、せめてもの看護の気持だった。

午後になった頃、やっと宇品部隊から救援の兵隊がやって来て、苦しんでいる人達を少しずつ宇品の方へ運んで行くようになった。私も必死に頼んでやっと妹をつれて行ってもらった。戸板にのせてつれて行かれる妹の上に、持ち出した白いシーツをかけてやり、小さい子供づれでは遠い道をついて行くわけにゆかず、そこで別れたのだけれど、それが最後の別れになってしまった。

それでも宇品に着いた頃はまだ何とか名前ぐらいは言えたのか、探しまわっていた夫が大分後になって街角に張り出された死者の名前の中に妹の名前を見つけて宇品へ行った時は、「八月七日死亡」の紙片一枚渡されただけで、髪の毛一筋あるわけもなく、死人が何かつけていれば、すぐそれをはいで他の人が自分の身につける有様で、一人一人埋葬するなど間に合わず、大きな穴を掘って、死体を一度に重ねて焼いたということだ。妹の様に名前がわかっただけでも、良い方なのだろう。

やがて日も暮れかけ、火勢も衰えていたので、私達は自分の家の方へ帰ってみた。家々は全部焼けてしまい、まだ煙がくすぼり、残り火がチロチロ見える処もあって、中へは熱くてとても入れない。川岸の広場に近所の人達が集って来てにぎやかになった。近くの倉庫にあったと半焼けの麦の俵を見つけて来て皆に分けてくれた男の人もある。お隣りの奥さんは鶏の丸焼けを一羽下さったけれど、殆んど黒焦げで食べるところがなかった。りちの庭の南瓜もやっぱり駄目だった。

お隣りでは私達の逃げた後も、川岸で我が家の焼けるのを見

とどけたとのこと。火がせまって熱くてたまらず、川に浸って我慢したけれど、川には死んだ人が、沢山流れて来たとのことで、小さな子供づれではとてもそんなことは出来ず、早く逃げてよかったと思った。

あの時私たちが助かったのは、家の奥の方に居たせいで、それも開けはなった縁側は燥心地から直角になっていて、何軒もの家の壁にさえ切られ、光が直接に屋内に入らなかった故だと思う。家の中でも窓際にいた人は、死なないまでも目くらになったり、火傷をしたりしている。

「娘が奥の方から　お母さん、助けて！　お母さん！　と呼んでいるのに、どうしてもそこへ行くことが出来ず、そのうち周囲から火がまわって来て、仕方なく見捨てて逃げて来たのよ」と泣いている年配の女の人もいる。重い物の下になったり、柱にはさまれたりしてどうしても抜け出すことが出来ず、生きながら焼かれた人も沢山あったと聞く。それをむざむざ見捨てて来なければならなかった身内の人の気持ちも、どんなに辛い地獄の苦しみだったろう。

「あの時自分は家の中から、戸口に立っている女房と話をしていたのに」と小さな子を抱いた男が「其の瞬間、気がついたらもう女房の姿は影も形もなく、いくら探しても……」と泣き声で話している。

うちのもう一方の隣家の老夫婦の御主人の方は、丁度郊外に出掛けていて、驚いて遠い道を歩いて市内に帰り、奥様を夢中であちこち探しまわって、やっと見つけた時は瀕死の重傷で、私達のいる焼け跡の外の広場まで運んで来た後、すぐに亡くなられた。老妻の亡きがらに取りすがって悲しみにくれる老人は、どうしても皆のいるここへ埋葬するのだと言ってきかず、息子夫婦になだめられ、やっと郊外の親類の家へ、つれて行かれた様だ。その老夫人も義妹と同様に当番で、市役所近くの勤労奉仕に、行っていた為に亡くなられたので、二日後だったら私が当番で、出ている筈だった。義妹が子供達と留守番をしてくれ、私が道路にいて、あの熱風を浴び死んでいたことだろう。私が死んでいたら家族それぞれの運命も違っていたし、この三重県に来ることだって無かっただろう。私の両親が伊勢に住んでいて、息子にも死なれた為、我家族と一緒になったのだから、私の両親の晩年も又、如何なっていたかわからない。あの時亡くなった多くの人々に代わってもらって、私達は生きているのだと思われてくる。

その義妹と住んでいた義弟は、向灘の会社に出勤したばかりで、二階の窓ガラスはすっかりこわれ、傍にいた人は怪我をしたりだったが、その反対側にいた為に無事で、夜には歩いて私達の処まで辿りついた。会社は広島の一番東のはずれを流れている川の向う岸にあり、万一出勤途中だったらとても生きてはいられず、一寸手前の広島駅などは死人で、埋まっていたそうだ。焼け跡のくすぼりの中、一望の瓦礫の町と化した、まだ熱い道をやっとの思いで歩いて帰り、私たちを見つけてくれたのだった。多勢集っていたあの時私達は何を考えていたのだろう。何を話し合ったのだろう。うちの家族は大した怪我もしていなかったから、野宿をしたり、たまにB29の爆音がすると、あわてて庭の防空壕にかけこんだりしたけれど、ただ茫然と何の考

えも感情もなく坐っていた様な気がする。あたりで苦しんでいる人、死にかけている人があっても、同情する気も、何とかしなければという気もなかった様だ。

夜があけて又暑い夏の日になった。うちの玄関の前は、家主の広い庭をかこんだ石の塀で、中をのぞいたこともなかったのが、すっかり倒れて焼け跡になり、水道の栓から水が出ているので皆が水を飲んだりしている。あの一寸前にはこの石塀の前にいたのにと思うと、私達の古い家のお陰で、皆生きていられたのだ。運が良かったと思わずにいられない。でも、相生橋から八丁目あたりまでは、何処に居たって全滅だったし、私達の居た九丁目どころか、もっとずっと離れた処でも、外に居た人は、すぐに死ななくても、火傷の為どんどん弱って亡くなった。その火傷は死に至らなくてもケロイド状に赤紫色に醜くはれ上って、深い傷を残すのだ。

二日目か三日目頃、田舎の方から握り飯がとどいたから鷹野橋へ取りに来るようにと、言われ、二才と四才の子供二人はじっとしているようによく言いふくめて、私は長女をつれて川ぞいの道を鷹野橋まで行くのだが、暑い日の道は、はだしの裏があつくてあつくてたまらず、やっと草履の様なものを片足ずつ見つけて行くと、その道には裸の人が黒こげになって、いくつもいくつも横たわっている。胸のふくらみでやっと若い女の人かとわかり、中にはまだ息があるのか、ほんの少し目ぶたが動いている。握り飯は一人に一つづつしか渡してくれないので、残して来た子供の事を思うと、私たちは又人々の後にもう一度並んで、それをもらって帰った。何日ぶりかで食べたその白米の御飯のおいしかったこと。何処にこんなお米があったのかと、やっぱり田舎にはお米が沢山かくされてあったのかという気と両方で、口に入れたのだけれど、そのお握りには塩味もなく、梅干のかけらもなくて、沢山は食べられなかった。

呉から夫が探しに帰ってくれたのは三日目だった。前の日に呉から歩いて広島に着いたのは夜で、まだあちこちに火の色も見え、とても大手町九丁目まで行けそうもないと、あきらめ師範学校へ引き返して泊って、翌日昼になってやっと私達を見つけたのだった。もうとても生きてはいまいとあきらめていたそうだ。呉からはあの物すごいきのこ雲が見えて、皆で何だろうと大さわぎだったとのこと。それまでは呉の方が、大空襲があったり、艦砲射撃されたりで、広島にいるよりずっと命がけだった。交替の教官が来てくれたので、学生の事は頼んで帰って来られたのだ。

夫は一たん学校まで戻り、翌日荷車を持って、学生二人と迎えに来てくれた。焼け跡から探し出した物や、土の中に埋めておいた箱などわずかな物と一緒に小さい子二人も乗せて、私達はまだ残っている近所の方々に別れをつげ、広島の町を横切って、学校へ身をよせた。

さえ切るもののない静まり返った瓦礫の街を、荷車の後から疲れた足で、長い道を黙って歩いた。もう其の頃には死んだ人は見つからなかった。軍の手で、小学校の校庭などに、運ばれ並べられてあった。何処の誰ともわからないままに、近親者に探し出されることもなく暑い時だから、すぐ火葬してしまったと思われる。近郊からも沢山の勤労奉仕の人達が、広島市内に

出ていたので、その身内の人が探しに歩きまわって、その為に後で原爆症になった人も多いと聞いている。私達は焼け跡に三晩も過し、広島の町を横ぎって南の端の、ぶどう畑や芋畑に囲まれた学校に着いたのだけれど、其の頃には私のお腹には末娘がいたわけで、それが現在まで何事もなく生きて来られたというのは、よっぽどの幸運というのか、不思議でならない。

学校の建物はこの辺まで来ると建物は立っていても、窓のガラスは全部メチャメチャにこわれ、標本室の戸棚からびん類などすっかり倒れていて足のふみ場もない有様だ。私達は附属小学校の一室を片づけ、窓にはベニヤ板を打ちつけ、作法室などから畳を何枚か持って来てとにかく寝ることが出来る様にして、その室で終戦の日を迎え、戦後の日をしばらく送ることになった。

本校の方に居た軍隊の解散のこと。死者の火葬のこと。空を覆う様にして飛んで行ったB29の大編隊の恐しかったこと。翌年二月にその教室の仮住いで生れた末娘のこと。師団跡に建てられたバラックに移ってからの生活のことなど。まだまだ書いておきたい事は、沢山あるのだけれどここで一まず終ることにする。

秋日漫読

岡　正基

十一月××日　（水）

武田泰淳論続稿のため、『史記　司馬遷の世界』加地伸行著（講談社現代新書）読み始める。今年の『文学界』六月号、七月号にその加地と石上玄一郎との間に論争あり。加地は泰淳の『司馬遷』には学問的価値なしとしている。そして特に初版序文の「戦争礼讃」の文言、及びその戦後版の削除を槍玉にあげている。加地は昭和十一年生れ、泰淳の当時の現実（検閲、泰淳の逮捕、中国従軍等）について、やはり後代の高みからの感あり。文献的に、学問的にというが、泰淳はそこからはみ出し、「恥」から文学出発したところに核心がある。ともあれ、加地は石上がこの本を読まないで論じていると批難しているので、こちらも読まなければというわけ。

司馬遷の青年期の放浪、官途に絶望したこと、父司馬談の志をつぎ、「名を顕す」ことをもって「孝」の最大のものとしたとするところ、今のところ別に異論はない。

十一月××日　（木）

漢代の呪術と迷信の実情、司馬遷もその時代の人物であること、また　の太史公の職が天文・暦も行い、天人の相関説の範囲にありというところ、たしかに「史記」を近代的観点のみで律することは間違いであろう。李陵弁護事件を、武帝の対外政策による「悲劇的財政破綻」に対する批難と見、そのため武帝の逆鱗にふれたというところは面白い。しかしもう一歩言えば泰淳は当時の日本が単に経済的でない時点で書いていることに、